



日本スポーツとジェンダー学会 第 22 回大会

プログラム & 発表抄録集

開催日: 2023 年 7 月 1 日(土)・2 日(日)

会 場: 中京大学名古屋キャンパス 1 号館 5 階 154 教室

主 催: 日本スポーツとジェンダー学会

共 催: 中京大学スポーツ科学部

中京大学大学院スポーツ科学研究科

日本スポーツとジェンダー学会 第 22 回大会

大会要項

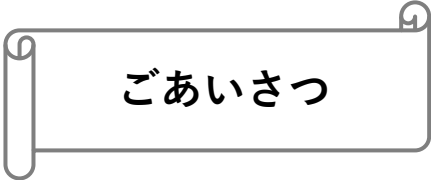
期 間 2023 年 7 月 1 日(土)13:00 ～ 7 月 2 日(日)16:20

会 場 中京大学名古屋キャンパス 1 号館 5 階 154 教室

〒466-8666 愛知県名古屋市昭和区八事本町 101-2
<https://www.chukyo-u.ac.jp/information/access/>

主 催 日本スポーツとジェンダー学会

共 催 中京大学スポーツ科学部、中京大学大学院スポーツ科学研究科



ごあいさつ

日本スポーツとジェンダー学会 第 22 回大会 大会委員長 来田 享子(中京大学)

この度、中京大学にて日本スポーツとジェンダー学会第 22 回大会を開催いたします。学会設立から 20 年を迎えた時期にあたる 2020 年～2022 年は、新型コロナウイルスの感染拡大のためにオンラインでの開催となっていました。3 大会ぶりに対面会場を設置し、会員のみなさまと情報共有や議論ができることとなりました。また、今大会では、3 年間のオンライン開催で得た技術を活かしてハイブリッド開催とし、より多くの方に参加しやすい環境を整えることを試みます。

本学会では、2018 年以降、2～3 年ごとに統一テーマを設け、各大会のテーマ設定や企画を行ってきました。2018 年からは「スポーツとジェンダーを展望する-東京 2020 大会後を見据えて」、2020 年からは「過去 20 年間のスポーツのジェンダー研究と体育・スポーツ科学研究のレビュー」が統一テーマでした。これらのテーマにそって深めてきた議論において、スポーツとジェンダーに関わる学術が常に意識すべきことが浮き彫りになりました。それは、身体的性差と社会的性差（ジェンダー）の相互関連性は時代や社会に伴い変化するものであり、その変化を精緻に捉える視点が欠かせないということです。

ジェンダー関連の学術領域では、「科学」は客観的・中立的だと考えられているにも関わらず、その内実においてはさまざまな規範や時代の価値観の影響を受けており、それが身体的性差と社会的性差の関係を規定する重要な要素となっていることが指摘されてきました。身体に関わる文化である体育やスポーツは、こうした「科学」のあり方に方向づけられながら発展してきた分野です。

近年、「科学」をジェンダー視点から再検討することを通じ、科学技術のみならず社会全体の変革を促すことへの期待が高まっています。そこで本大会では、基調講演の講師として、科学史とジェンダーに関する研究の第一人者である小川眞理子氏をお迎えすることとしました。この基調講演を踏まえ、研究委員会による国内の体育・スポーツ科学研究をジェンダー視点から検討したプロジェクトの報告をもとに、議論を行います。また第 2 日には、一般発表 6 題、学会員による研究プロジェクト報告 1 題、学会で現在進めている「スポーツとジェンダー・データブック」出版に関する意見交換が予定されています。慣例では第 1 日目のプログラム終了後には、懇親会が開催されてきました。残念ながら、これを再開する環境には至っていないことから、コーヒートークの時間を設けるなどの工夫をいたしました。

国会では「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解増進に関する法律（LGBT 理解増進法）」が成立しました。この法律をめぐっては、トランスジェンダーの人々があたかもスポーツにおける女性の環境に負の影響を与えるかのような、誤った情報が流布しています。そうした情報の誤りを学術的立場から訂正し、性的指向や性自認にもとづくあらゆる差別を容認しない体育・スポーツの未来をめざすために、本学会の役割の重要性は増しています。実りある情報交換の場となるよう、多くの方の積極的な参加をお待ちしています。

最後に、本学会の開催を共催し、会場を提供してくださった中京大学スポーツ科学部・中京大学大学院スポーツ科学研究科に深く感謝の意を表します。

【会場のご案内】

■ 交通アクセス(中京大学名古屋キャンパス)



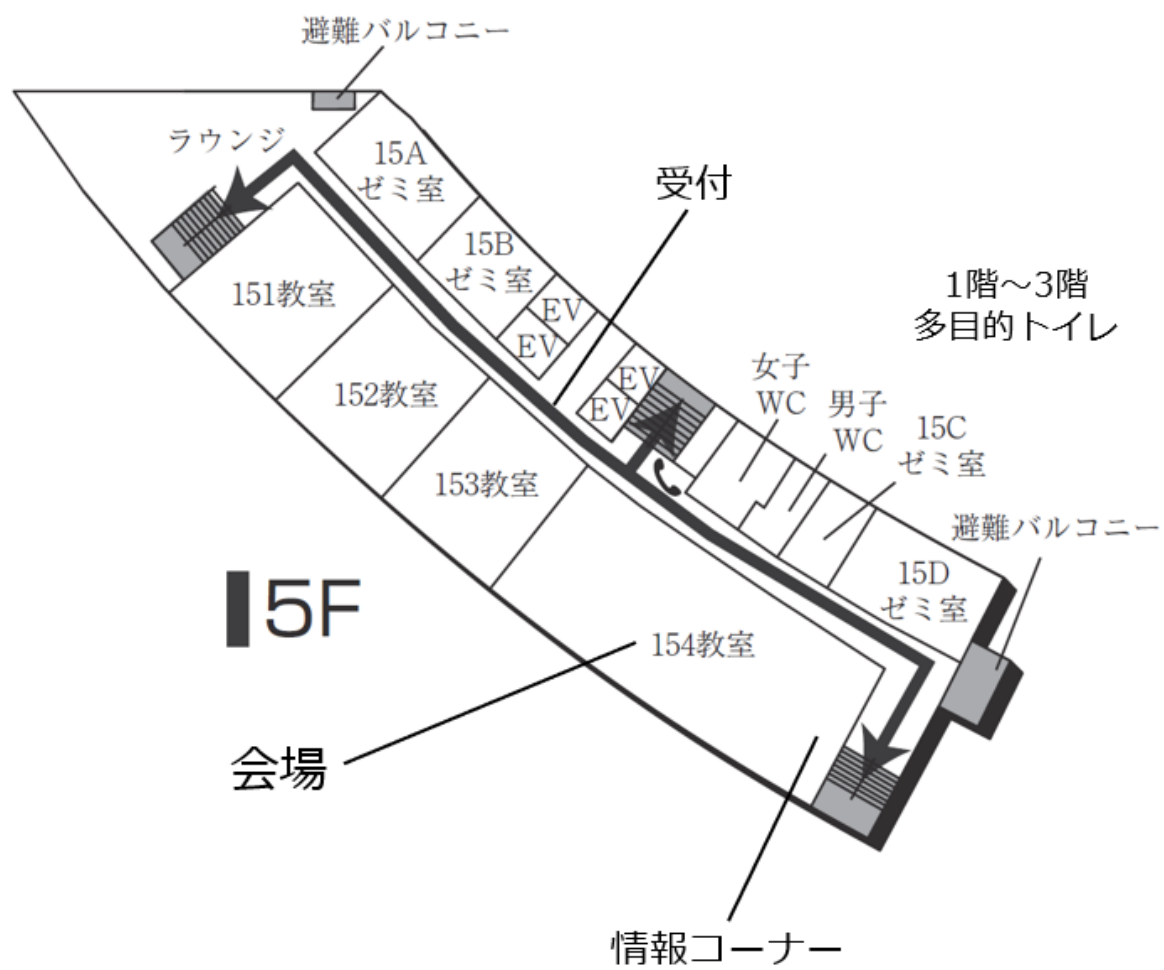
※名古屋キャンパスには駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

■ 会場(1号館 5階 154教室)までの経路

名古屋市営地下鉄 八事駅 5番出口 徒歩すぐ



■ 1号館5階 会場図



参加者のみなさまへ(諸連絡)

- ネームタグは大会期間中、常時ご着用ください。大会終了後またはお帰りの際に、受付(回収箱)にご返却ください。
- 会場内は全館禁煙です。喫煙される方は、喫煙所(屋外)をご利用ください。
- キャンセルによる大会参加費の返金には応じかねますので、ご了承ください。
- 今大会では飲食を伴う形での情報交換会は開催せず、2日目のお昼休みの時間を長めに取り、情報コーナーを拡大させた形で会員相互の交流を図ります。
- 大会の様態を記録するため写真を撮影いたします。参加者のみなさんのプライバシーには十分配慮し、会場後方からの撮影を行います。あらかじめご了解くださいますようお願い申し上げます。

アンケートご協力のお願い

より充実した大会を開催するため、参加者のみなさんにアンケートへのご協力をお願いしております。右のQRコードを読み取っていただくか、URL(<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSermmshUxXzmG1bMXQtLdYKPV9pq7KLxTksimOUfxdTgA1uoA/viewform?vc=0&c=0&w=1&flr=0>)からアンケートフォームにアクセスしてご回答ください。皆様のご意見をお待ちしております。



日本スポーツとジェンダー学会における個人情報の取り扱いについて

「個人情報保護法(個人情報の保護に関する法律)」の施行(2005年4月1日)を受け、日本スポーツとジェンダー学会(以下、本学会という)主催の学会大会における会員以外の参加者の個人情報の取り扱いを、下記のとおり定めております。

本学会は、研究機関として個人情報を取り扱う場合に、目的のために必要な情報のみを本人の同意に基づいて取得し、目的の終了後には速やかに削除することを基本方針としています。組織運営および研究事業においてもこの基本方針を遵守し、また今後とも継続的に改善することとしています。

1. 大会参加のための手続書類で取得した個人情報の利用目的について(会員外)

本学会は、会員外の参加者のみなさんから参加手続で取得した氏名、住所など個人情報を、以下の目的のみに利用します。

- 1) 当該大会の円滑で安全な運営のため
- 2) 今後の本学会の研究活動の参考資料とするために、個人を識別できない形式による参加者の統計作成

2. お問い合わせ先

個人情報に関するお問い合わせは、本学会事務局(e-mail: info@jssgs.org)までお寄せ下さい。

運営組織

日本スポーツとジェンダー学会 第22回大会 実行委員会

部 署	氏 名(所属)
大会委員長	來田 享子(中京大学)
実行委員長	藤山 新(東京都立大学)
事務局長	岩佐 直樹(朝日大学)
事務局	井谷 聡子(関西大学／学会事務局)、岩佐 直樹(朝日大学)、鈴木 楓太(京都先端科学大学)、田原 淳子(国士舘大学)、藤山 新(東京都立大学)
研究	井谷 恵子(京都教育大学)、高峰 修(明治大学)、波多野 圭吾(国士舘大学)、前田 博子(鹿屋体育大学)、三上 純(大阪大学大学院)、山口 理恵子(城西大学)
受付・接遇	大勝 志津穂(椙山女学園大学)、熊安 貴美江(大阪公立大学)、竹崎 一真(明治大学)
会場	木村 華織(東海学園大学)、安江 あ也香(中京大学大学院)、赤澤 祐美(国士舘大学大学院)
広報	岡田 桂(立命館大学)、工藤 保子(大東文化大学)、小林 直美(愛知工科大学)、申 恩真(北星学園大学)
記録	稲葉 佳奈子(成蹊大学)、関 めぐみ(甲南大学)
サポート スタッフ	コウ タクウー(中京大学大学院博士1年)、ソウ イ(中京大学大学院博士1年)、天野 薫平(中京大学大学院修士2年)、エン カカ(中京大学大学院修士1年)、太田 明李(中京大学大学院修士1年)、黒田 佳代(中京大学大学院修士1年)、田口 侑晟(中京大学大学院修士1年)、チェン ユウシン(中京大学大学院修士1年)

大会日程

第1日目:7月1日(土)

12:30	受付開始
13:00	開会挨拶
13:10	基調講演 「科学は女性の身体をどう捉えてきたか」
14:30	休憩
14:50	研究委員会プロジェクト報告 「日本の体育・スポーツ科学研究とジェンダー」
17:05	休憩
17:20	総会 ＜154教室＞

第2日目:7月2日(日)

9:00	一般発表 9:00～9:30 発表① 9:35～10:05 発表② 10:10～10:40 発表③ 10:45～11:15 発表④ 11:20～11:50 発表⑤ 11:55～12:25 発表⑥
12:25	お昼休み (参加者交流タイム(情報コーナー))
14:00	学会員プロジェクト報告 「身体の規律化手段への抵抗—中国都市の太極拳教室の女性たちを対象にして—」
14:30	休憩
14:40	実行委員会企画 「スポーツとジェンダー・データブック 進捗報告と意見交換」
16:10	
16:20	閉会挨拶

大会プログラム

< 7月1日(土) >

12:30～ 受付 <1号館 5階エレベーターホール前>

13:00～ 開会挨拶

13:10～14:30 基調講演
「科学は女性の身体をどう捉えてきたか」
小川 眞里子氏(公益財団法人東海ジェンダー研究所)

14:50～17:05 研究委員会プロジェクト報告
「日本の体育・スポーツ科学研究とジェンダー」
高峰 修(明治大学)、池袋 真(昭和大学)、井谷 恵子(京都教育大学)、
大勝 志津穂(相山女学園大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)、
三上 純(大阪大学大学院)、山口 理恵子(城西大学)

17:20～ 総会

< 7月2日(日) >

一般発表(9:00～12:25)

- ① 9:00～9:30 座長:前田 博子(鹿屋体育大学)
「女子大学生の生涯スポーツ推進に有用な大学体育授業の検討ー経済学的視点を取り入れた講義受講前後にみられる生涯スポーツに対する意識の変化に注目してー」
○佐野 信子(立教大学)、平工 志穂(東京女子大学)
- ② 9:35～10:05 座長:山口 理恵子(城西大学)
「『いのち』を知り生かす身心一体科学に基づく体軸制御調律運動ー方法と理論ー」
○跡見 順子(帝京大学先端総合研究機構)、藤田恵理(東京女子大学)、
跡見 綾(東京農工大学)、清水美穂(帝京大学先端総合研究機構)
- ③ 10:10～10:40 座長:登丸 あすか(文京学院大学)
「女性アスリートたちのテレビ表象分析ー2016年リオオリンピック直前に放送された特別番組の分析を中心にー」
○山本 夏生(一橋大学大学院)
- ④ 10:45～11:15 座長:建石 真公子(法政大学)
「女子ボクサーたちはどのような権利を求めたかー1970-80年代の米国における女子ボクサーたちが直面した困難ー」
○鬼頭 茉衣(中京大学大学院)、來田 享子(中京大学)

- ⑤ 11:20～11:50 座長:工藤 保子(大東文化大学)
「スポーツに関わる理学療法士が長期に活動を継続するための課題ー産休・育休後のトレーナー活動の現状と性別役割分業意識ー」
○平野 佳代子(井戸田整形外科名駅スポーツクリニック)、來田 享子(中京大学)
- ⑥ 11:55～12:25 座長:関 めぐみ(甲南大学)
「スポーツ指導者の多様な性に対する知識と態度の変化ー2017 年度と 2022 年度の調査結果の比較よりー」
○大勝 志津穂(相山女学園大学)、高峰 修(明治大学)、伊東 佳那子(中京大学)、
建石 真公子(法政大学)、田原 淳子(国士舘大学)、藤山 新(東京都立大学)、
松宮 智生(清和大学)、來田 享子(中京大学)
- 12:25～14:00 参加者交流タイム(情報コーナー)
- 14:00～14:30 学会員研究プロジェクト報告
「身体の規律化手段への抵抗ー中国都市の太極拳教室の女性たちを対象にしてー」
範 麗娟氏(関西学院大学大学院)
- 14:40～16:10 実行委員会企画
「スポーツとジェンダー・データブック 進捗報告と意見交換」
日本スポーツとジェンダー学会「スポーツとジェンダー・データブック」編集委員会
- 16:10～16:20 閉会(閉会あいさつ、事務局連絡)

日本スポーツとジェンダー学会 第22回大会 発表抄録

pp. 11-13 基調講演

「科学は女性の身体をどう捉えてきたか」

pp. 14-16 研究委員会プロジェクト報告

「日本の体育・スポーツ科学研究とジェンダー」

pp. 17-23 一般発表

pp. 24-25 学会員研究プロジェクト報告

「身体の規律化手段への抵抗

—中国都市の太極拳教室の女性たちを対象にして—」

pp. 26-27 実行委員会企画

「スポーツとジェンダー・データブック 進捗報告と意見交換」

基調講演

「科学は女性の身体をどう捉えてきたか」

科学は女性の身体をどう捉えてきたか

小川眞里子（東海ジェンダー研究所）

キーワード：1セックスモデル、2セックスモデル、ヴェサリウス、エドワード・クラーク、女性医師

科学史が専門なので、スポーツとジェンダーを話題にする場合、直接結び付くわけではないが、科学が女性の身体をどのように捉えてきたのかをお話し、そこからスポーツへと繋ぐことを試みたい。

まず、科学の基礎をなすとされる観察が、一般に想定されているほどに客観的でも普遍的でもないことを実感していただけたらと考えた。私たちの身体は自然の一部であり、科学的観察の対象であるが、その観察が時代によって大きく異なるのはなぜなのか。過去の資料を通して、今日の私たちの身体観が長い歴史の所産であることを示したい。

そうした作業を経て最初にお示ししたいのは、女性の身体に対するアリストテレスの見方である。彼の身体観は、後のローマ時代のガレノスを経て、ルネサンス期まで 2000 年近く西洋に影響を及ぼしてきた。アリストテレスにとって性は1つであり、女性は熱の不足によって、男性になり損ねた未完成品と考えられた。したがってセックスは1つでジェンダーは2つという時代が恐ろしく長く続いたのである。このことは男女の身体を観察して残された後の解剖図からも見て取れる。次に 16 世紀半ばに出版されたヴェサリウスによる人体解剖図を取り上げる。それは近代的な描図法を駆使して完成された画期的なもので、骨格、筋肉、血管、神経を細部にわたって明らかにした多くの図版によって構成され、たしかに近代科学の幕開けを告げる傑作である。しかし、詳しく見るとガレノスの影響が色濃く残存していることもわかっている。

時代が下り 18 世紀になると、ようやく男女は身体全体で明らかな違いをもって認識されるようになる。1セックスモデルから、2セックスモデルへと人々の認識は変化し、男女の性は補完し合う両性として評価されるようになる。そうして初めて女性の骨格図が誕生することになったのである。そこで強調されたのは女性の骨盤であった。他方、女性の乳房も脚光を浴びることになった。一般に分類名というのは、動物学的観点からその名前の下に、グループに属する全員に共通する特徴を代弁するものであろう。脊椎動物亜門には、魚綱、両生綱、爬虫綱、鳥綱、哺乳綱があるが、哺乳綱 Mammalia（乳房類）という綱名は、アリストテレスからの伝統を断ち切って、意外な経緯から新規

に命名されたものであることを紹介する。

女性の身体は主として解剖学的観点から捉えられてきたのであるが、19 世紀になると性差は男女の身体の機能的な違いに注目して研究が進められた。従来、生物の研究は、アリストテレスの時代から動物学と植物学に分かれており、生物学 biology という両者を統合した学問分野は 19 世紀になって初めて誕生したものである。それは、動物、植物にかかわらず両者に共通の生命の成り立ちを、博物学的研究とは異なる生理学的研究に基づいて解明しようとする新たな学問分野である。哺乳動物のメスの一部に月経があることは 18 世紀には十分気づかれていたが、女性特有の月経について排卵との関係で詳しい研究が行われるようになるのは 19 世紀になってからである。

19 世紀も後半になると、女性の月経の説明にエネルギー保存則や社会ダーウィニズムを結び付けて、女性の高等教育を危ぶむ声が上がってくる。とくに大きな影響を与えたのが、ハーヴァード大学教授エドワード・クラークの『教育における性差』（1873 年）であった。女性の思春期は将来の出産に備える重要な準備期間であるとした彼は、多くのエネルギーを要するその時期に、頭脳を酷使する高等教育は過重な負担であり、女性は高等教育を諦めるべきであると説いた。

これに対して各方面から賛否両論が寄せられたが、中でも説得力ある反対意見を表明したのが、米国（M. P. Jacobi や C. D. Mosher）および英国（E. G. Anderson）で活躍し始めていた女性医師であった。クラークの指摘が当たらないことは女子学生の実態調査からも明らかにされ、学生生活の経験のない姉妹に比べ、女子カレッジの学生たちは適切にスポーツに親しむことによって、むしろ体力をつけていることも見出された。また身体を強く拘束する衣服にも目が向けられ、自由で動きやすい服装も提案された。

西洋世界で女性の身体は、男性の出来損ないと考えたアリストテレスに始まり、18 世紀には補完的ながら男性と並び立つ性となり、さらに産むだけの性から脱してスポーツの楽しみも享受するようになった。

本発表のとくに 19 世紀末から 20 世紀に関連しては、香川せつ子氏、横山美和氏の多くの研究を参照させていただいた。記して感謝したい。

小川 眞里子（おがわ まりこ） 公益財団法人 東海ジェンダー研究所・理事、三重大学名誉教授

専門分野：科学史・科学論

主な経歴：三重大学人文学部教授を経て現職

主な著書・最近の論文：

- ・単著『病原菌と国家』名古屋大学出版会 2016 年
- ・共編著『女性研究者支援政策の国際比較』明石書店 2021 年
- ・単著『消されたパンデミック——「スペイン風邪」と女性参政権運動』『現代思想』6 月号 2023 年
- ・単著『日本の STEMM 分野における女性人材の歴史（特集 2：科学技術人材のダイバーシティ研究）』科学技術社会論研究 2021 年
- ・共訳『科学史から消された女性たち』（改訂新版）ロンダ・シービンガー 工作舎 2022 年
- ・共訳『ジェンダーは科学を変える!?!』ロンダ・シービンガー 工作舎 2022 年

社会活動など：前三重県男女共同参画審議会会長ほか多数

研究委員会プロジェクト報告

「日本の体育・スポーツ科学研究とジェンダー」

日本の体育・スポーツ科学研究とジェンダー

○高峰修（明治大学）、池袋真（昭和大学）、井谷恵子（京都教育大学）、
大勝志津穂（相山女学園大学）、田中千晶（東京家政学院大学）、
三上純（大阪大学大学院人間科学研究科）、山口理恵子（城西大学）

キーワード：体育・スポーツ科学、研究、性差、ジェンダー

1. 過去3年間の経緯

今期の研究委員会では、「過去20年間のスポーツのジェンダー研究と体育・スポーツ科学研究のレビュー」を2020～2022年度までのテーマとして設定した。このテーマは、20年間という本学会の活動期間に体育・スポーツに関する研究がどう変わったのか（変わらなかったのか）を確認する作業が必要であるという認識、さらには「多様性と調和」を唱う東京2020の開催が体育・スポーツ科学研究に何か影響を及ぼしたのだろうか、という問題意識に基づいている。具体的には各年度の学会大会と春季研究会の場で、2020年度は「スポーツとジェンダーに関する国際的な研究動向」を、2021年度は同じく「国内の研究動向」を確認してきた。

2. 研究目的と方法

最終年度の2022年度は、視野を国内の体育・スポーツ・健康科学研究に広げ、体育・スポーツ・健康科学を構成する各分野の機関誌に掲載された論文を対象とし、各論文において性別あるいは性差がどのように扱われ、どのように語られているかについて量的に把握することを目的とした。

対象とする論文等は体育学研究、体力科学、スポーツ心理学研究、発育発達研究、スポーツ社会学研究、体育科教育学研究、生涯スポーツ学研究の7誌に掲載された研究資料等を含む論文である。対象期間は2013年1月～2022年12月の10年間とし、基本的にはAcker（1981）を参考にした三上（2022）の類型枠組みに基づき、さらにメンバー間の意見交換を経て本プロジェクトにオリジナルの類型枠組みに変更した。その類型枠組みを用いて7人のメンバーが各誌に掲載された論文等を分類した。その際に不明瞭さが残る基準等については、2回のミーティングにおいて共有し、統一を図った。最終的な類型枠組みは以下のとおりである：

(1) 性別（分析段階における対象の性別）

女性のみ：対象者を女性に限定していることを明示しているもの

男性のみ：対象者を男性に限定していることを明示しているもの

両性：対象者を女性と男性に限定していることを明示

しているもの

両性と「その他」や「どちらでもない」：「男性」と「女性」に加えて「その他」「どちらでもない」「不明」を分析に含めていることを明示しているもの

不明：対象者の性別に関する明示がないもの

(2) 分析の手法（統計分析における性別の使い方）

A. 男女別の集計・分析

B. 男女の比較・検定

C. 性差の考慮

D. 性別での分析なし

E. 上記の複数に該当

F. 性差の調整・統制

(3) 分析結果の解釈（性差の解釈の仕方）

ア. 性差の要因の放置：性差があるが、その要因については考察していない

イ. ジェンダー視点なし：性差があり、その要因についてジェンダー視点は含まずに解釈・考察している

ウ. ジェンダー視点あり：性差があり、その要因についてジェンダー視点から解釈・考察している

エ. 性差ないことの言及：性差がなく、それに言及・考察している

オ. 性差ないことの無視：性差がなく、それに言及・考察していない

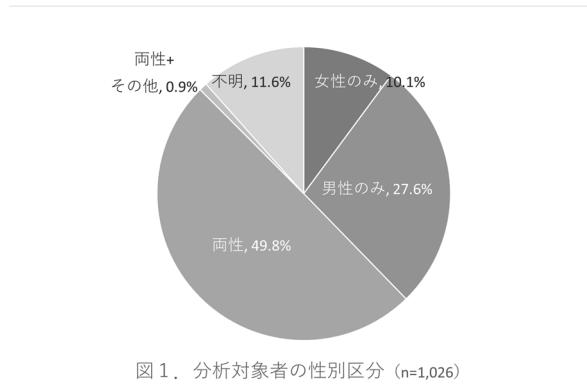
カ. 性差の無視：両性を研究対象としながらも性差についての分析や言及・考察がない

3. 結果

(1) 概要 2013年～2022年に7誌に掲載された論文等の総数は1,333本であった。そのうち「人間を対象に各種調査・実験・観察を行った実証研究」という条件で分析対象として抽出した本数は1,026本である。その内訳は論文（総説、原著）69.9%、その他（研究資料等）24.7%であった。実証のためのデータとして数値を使ったタイプが83.2%、インタビューや観察などの結果をテキストで示したタイプが11.9%、数値とテキストの両方を用いたタイプが4.2%、どれにも当てはまらないタイプが0.7%であった。

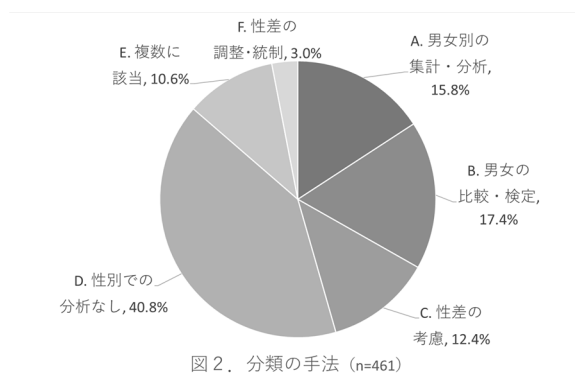
(2) 分析対象の性別 図1に示すように、男性と女性を対象とする両性が49.8%と最も多く、続いて男性の

みが27.6%を占めた。論文で扱った分析対象の性別が「不明」な論文が11.6%を占め、「女性のみ」をわずかに上回った。質問紙の性別欄に回答しなかったり、男性と女性以外の選択肢を選んだ場合を含む「両性+その他」はわずか0.9%であった。



このうち数値を用い、かつ分析対象を「両性」と「両性+その他」とする論文461本を対象に分析を進める。

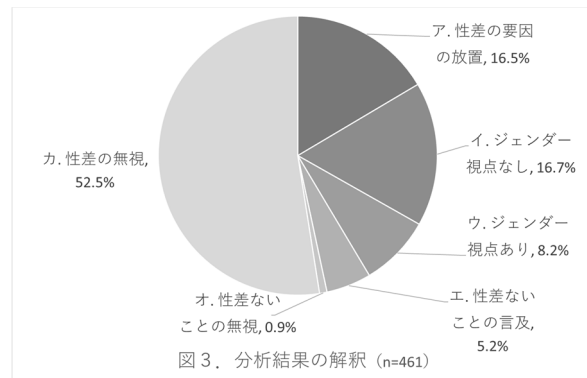
(3) 分析の手法 両性（その他を含む）から収集した数値データを使って統計分析をする際に、性別がどのように扱われているかの分類結果を図2に示した。



数値データを調査対象から収集する際に性別情報を把握している論文において、「性差があることがわかっている」など、分析を行う前に性差があることの記述があり、さらにそれを踏まえた分析を行っている論文（C. 性差の考慮）は12.4%に留まった。つまり、9割弱の論文では性差があることが自明の前提になっているか、あるいは性差の有無には関わらず性別がごく基本的なデフォルト変数として扱われているようである。

性別を分析の視点に含んでおり、男女で分けて集計や分析を行っている論文（A. 男女別の集計・分析）は15.8%、男女別の数値を求めて比較したり検定を行っている論文（B. 男女の比較・検定）は17.4%、調整・統制変数として性別を使っている論文（F. 性差の調整・統制）は3.0%、さらにそれらを組み合わせた論文（E. 複数の該当）は10.6%であった。他方、性別情報を把握しているものの分析段階では性別による分類・比較・調整等を行っていない論文が40.8%で最も多かった。

(4) 分析結果の解釈 性別変数を分析に用いた結果についてどのように解釈しているかの分類を図3に示した。



分析の結果、性差がなかったことに言及している論文（エ. 性差ないことの言及）は5.2%であったが、差がなかったことに言及していない論文（オ. 性差ないことの無視）は0.9%とわずかであった。性差があった場合に、その差が生じる要因について考慮しているか否かで分けたところ、性差が生じる要因に考慮していない論文（ア. 性差の要因の放置）は16.5%を占めた。

性差が生じる要因に考慮している場合、さらにその要因にジェンダー視点が含まれているか否かで分類した結果、ジェンダー視点から解釈・考察している論文（ウ. ジェンダー視点あり）は8.2%、ジェンダー視点を含んでいない論文（イ. ジェンダー視点なし）は16.7%であった。最後に、分析変数として性別を用いておきながら、性差についての分析や言及、考察がない論文（カ. 性差の無視）が52.5%と過半数を占めた。

4. 考察

図3からは、性別を分析に用いた論文のうち少なくとも40%（ア、イ、ウ）で「性差がある」という結果が導き出されていることがわかる。しかしそのうち性差が生じる要因についてジェンダー視点を含めた考察や解釈がされているのは8%に過ぎず、体育・スポーツ・健康科学分野にジェンダー視点が普及していない状況を確認できる。また「ア. 性差の要因の放置」に分類される論文では、性差の要因の検討が研究課題として示されるケースが少なくなく、そこにいかにジェンダー視点を含めていくかが課題になるだろう。

参考文献

- Acker, S. (1981) No-woman's-land. *Sociological Review*, 29: 77-104.
- 三上純 (2022) 「運動部活動の効果研究」の批判的レビュー：「性」はいかに扱われてきたのか？, *体育学研究* 67: 255-271.
- 謝辞 本プロジェクトの作業において工藤由依会員にご協力いただきました。記してお礼を申し上げます。

一般発表

女子大学生の生涯スポーツ推進に有用な大学体育授業の検討

経済学的視点を取り入れた講義受講前後にみられる生涯スポーツに対する意識の変化に注目して

○佐野信子（立教大学） 平工志穂（東京女子大学）

キーワード：ジェンダー,生涯スポーツ,大学体育,女子大学生,経済学的視点,

本発表者らは、ジェンダー平等の実現が望まれる現代社会において、女子大学生の生涯スポーツ意識の高揚に寄与する授業の在り方について議論し、研究を継続している。既に、2022 年には、「生涯スポーツ推進のための経済学的視点を取り入れた教育の可能性について—ジェンダー・スタディーズに立脚して—」と題する論文を発表した。そこでは、2022 年 4 月に関東圏に位置する 4 年制大学生 260 名に、経済学的視点を取り入れた講義の導入といった教育の有用性を検討するための Web アンケート調査を実施した結果を報告した。結論としては、「男女別での分析を試みると、現時点におけるスポーツ享受については、大きな男女差が認められるようになる（男子>女子）一方で、スポーツ実施による将来における医療費や介護費等といった経済学的側面での捉え方については男女差が小さく（男子≧女子）」なった。さらに注目すべき結果として、女子はスポーツに金銭を用いることについての意識が男子に比べて有意に低く、生涯スポーツ推進による経済効果に関する知識を女子に与えることは、有用であるのではないか、との結論に至った。

以上の研究を踏まえ、本発表者らは、同年、関東圏に位置する 4 年制大学において、1 年生（数名の過年度生が含まれる）を対象とした授業時に、女子 108 名を対象にさらなる調査を実施した。発表者である佐野が担当するスポーツ科目に、ファイナンシャルプランナー有資格者（以降、「FP」）をゲストスピーカーとして招聘し、経済学的視点からみたスポーツ実施の効果に関する講義（Zoom 形式）を依頼した。講義内容については、事前に FP と数度にわたる検討を重ね、本研究の趣旨を理解した内容であることを事前に確認した。講義においては、一例として、スポーツを学ぶことは組織に応じた適応力を学ぶことに繋がり、そこで得られる「組織に応じた適応力」というスキルは、将来の収入の底上げに通じることとなるとの説明がなされた。そして、社会に出る前の段階である大学生のうちに、少数で実施されるスポーツ実技授業において、「適応力」「リーダーシップ」「コミュニケーション能力」といったスキルを獲得することの必要性について言及された。

授業時間内の講義の前後に同内容のアンケート調査を実施し、経済学的視点を盛り込んだ講義が女子大学生の生涯スポーツ推進に有用であるかどうかを精査した。収集されたデータは量的・質的に分析された。

結果としては、量的な分析においては、「スポーツをすることは、あなたの人生にとって重要だと思いますか」といった質問項目や、「生涯にわたってスポーツすることで、将来のあなたの医療費は大幅に削減されると思いますか」といった質問項目等については、授業後に「全くそう思う」という回答が大幅に増加した。また、「スポーツするためにお金をかけることに抵抗がありますか」との問いについては、授業後に「抵抗がある」群が減少し、「抵抗がない」群が増加傾向を示した。質的な分析においては、「あなたにとって『スポーツ』はどんな存在ですか」「これからの人生で『スポーツ』をするメリットは何だと思いますか」という 2 つの自由記述による質問を設けた。KJ 法による分析をした結果、両質問ともに、授業前には「経済的メリット」と命名したカテゴリーに該当する回答が 1 件も見られなかったのに対して、授業後には、前者の質問へは「経済的な面で自分を助けてくれる存在」といった記述などがみられ、後者の質問へは「介護費や医療費を削減することに役立つ」「健康でいることでお金が節約できる」といった記述がみられるようになった。量的分析、質的分析共に、FP による経済的視点に立ったスポーツについての講義が、被調査者である女子大学生のスポーツ学習意欲を向上させ、生涯スポーツ推進に有用であるのではないか、という結論を導いた。

最後に、講義の感想として、高等学校時代の運動部活動について、活動してきたことをポジティブに捉えられなかった者（つまり、勉強にあてると思われる時間を運動に費やし、そのことをネガティブに捉えていた者）が少なからずおり、講義を受けることから、運動部活動に専念したことを肯定的に捉えられるようになった者が存在したことを報告したい。また、大学における必修のスポーツ授業の意味や意義が分からなかった者が授業を肯定的に捉えられるようになった様子が印象的であり、本講義以降のスポーツ実技授業は、より意欲的に取り組まれた様子がみられた。

『いのち』を知り生かす身心一体科学に基づく体軸制御調律運動

方法と理論

○跡見順子（帝京大学先端総合研究機構） 藤田恵理（東京女子大学） 跡見綾（東京農工大学） 清水美穂（帝京大学先端総合研究機構）

キーワード：身体、細胞、ジェンダーバイアス、身心一体科学

著者らは、体育・スポーツ科学を、太極拳やジェンダー学という視点も加えながら、科学との関係性について考えてきた。これまで本学会において、細胞という生命の創発・適応の単位から「いのち」を定義し（跡見, 2015, 2019）、人間の生存原理や適応変化につなぐ鍵となるストレスタンパク質（藤田等 2019）や長寿高齢社会の鍵を握る鶏卵殻膜なども含めて紹介し、議論してきた（清水等 2019）。以前に我々は、スポーツとジェンダー学の軸の形成の身体技法として、身体に直接働きかけ、身心を一体化する方法として太極拳を取り上げ、提案した（跡見綾ら, 2020）。太極拳における身心の使い方は、意識をまるごとの身体に向かわせると同時に、立位の身体をつくる軸骨格を支える抗重力筋（遅筋）に伸張性収縮というマイルドストレスを課す。このような太極拳の動きは科学の世界はもとより社会に満ちあふれるジェンダーバイアスやスポーツと暴力の切れない関係など、適応を論理的に説明できる「細胞」やその細胞達が上手に能力を引き出すマイルドストレスを受けるその身心の使い方を論理化に誘導してくれた。石水極子師範が、学び、解釈し、言語化し、指導する楊式太極拳は、ジェンダー化された身体ではなく、1Gの地球環境下で直立二足歩行を獲得してきた人間の身体を仲介する自己及び他者の理解にきわめて優れており、ジェンダーバイアスをなくすためのオルタナティブな方法として有効であることを述べた。そして、生命の単位、適応の単位「細胞」から論を進めること、さらにはその細胞が個々人の身体の内部にあるという紛れもない事実から身心一体科学を提唱し、自律的に生きている細胞と身体を持ち主である個人を適切に連携させることを提案した。また跡見ら（2020）は、健康と医療における性差に言及した。女性の健康寿命の短さに影響する関節疾患の多さは、骨形態や筋力、関節弛緩性などの生物学的性差と、社会的・文化的ジェンダー差を背景としたジェンダーバイアスが背景にある可能性が考えられ、これは自身の身体を含めた環境による影響が多く、変化し得るものであると述べた。ジェンダー化された身体による問題だけではなく、幼少の頃よりジェンダー形成された体育教育によって引き起こされたものとも言え、自分自身の身体に向き合

うことが有効であると提案した。

「身心一体科学」は、「いのち」そのものの自分自身の「からだ」を細胞生命科学や脳科学から説明し、同時に「からだを使って、やってみて観察・評価し、気づきも含めて言語化する新しい科学」である。その原理を自然と社会の両環境で生きる人間の身心問題に適用し「人間のいのちの本質・意欲を生み出す」実践科学である。（跡見順子）。身心一体科学では、本来一体設計で育った自分の身心でありながら、動作原理が分からず分離しがちな自分の身体と心を、多細胞生物の細胞の適応生存理論（①メカニカルストレス応答、②活動依存性）と、脊椎動物原型の臥位で自分で自分の身体に意識的に働きかける体軸制御調律運動の実践による自己の変化を言語化し、働きかけに応答できる自己を体感し発見し理解する科学である。人とはどのような存在か、どう生きればよいか。その答えを、地球上に創発した生命の適応応答の単位である多細胞動物の細胞の生存原理に求めて、立位を常態として生きる人への実践的対処法として解を提供する。細胞は人の目では見えない。先端的科学技術・顕微鏡のタイムラプス可視化で得た知見を教育に還元することは目的の一つである。細胞も、人と同様に基盤（床）に自ら支点と重心を生み出し力学応答して生きている。その細胞の生存原理と、自分と細胞との間の「入れ子」関係を、身心の一体化に適用すると、①通常意識に上らない姿勢（立位・座位・臥位など）の意味、②自分の身体と認知との関係、③自己の理解と出力依存性の意味の理解のための「随意筋」の存在、④身心への入力（触覚）・出力（体幹、及び末梢筋群との関係）連関、⑤身心連携の神経回路の構築（体軸調律運動も通常の学習プロセスと同じ原理）という観点を得る。細胞のメカニカルストレス応答戦略と立位及び臥位の制御戦略との関係を説明し、本人が納得するための立ち位置がある。1)健康は自分と細胞との協働で獲得できる、2)その細胞の基盤として自分の身体を位置づける、3)脊椎動物由来の体幹の不安定性と軸制御の正規化・意識による制御。発表では身心一体科学理論に基づく体軸調律運動の実践がもたらす身体スキルの変容についての人の研究成果も報告する。

女性アスリートたちのテレビ表象分析

2016 年リオオリンピック直前に放送された特別番組の分析を中心に

○山本夏生（一橋大学大学院）

キーワード：メディア表象、ジェンダー、スポーツ、オリンピック、テレビ

【問題の背景】スポーツ報道の中のジェンダー表現に関する研究は、国内において特に夏季オリンピックと女性選手がメインの研究対象に据えられ、数多くの蓄積がある（飯田 2003、梅津 2004、阿部 2008、小林 2017,2019,2020）。スポーツ報道の中の女性選手の描かれ方からジェンダー格差を明らかにした 15 のルール（Bruce2010）でも指摘があるように、いまだにルッキズムやプライバシー、女性選手の業績の矮小化が見受けられる。こうした検討は特にテレビニュースを中心事例として蓄積があるが、その他ジャンルの番組の検討は進んでいるとは言い難い。

【研究の目的と意義】

すでにリオ大会のニュース報道についてジェンダー視点の検討がなされているが、本研究ではあえて大会結果を示すニュースではなく、大会直前（2016 年 8 月 5 日）に放送された事前番組 2 つに着目する。登場する選手に対して、1)どんなエピソードが付与されていたのか、2)ジェンダー格差は存在するのか、3)ニュース番組における表象との比較の 3 つの点から検討を行う。本研究の目的は、従来ニュース番組を中心として蓄積されてきたアスリートのメディア表象の傾向が、ニュース以外のジャンルの番組の中で果たして強化・再生産されているのか、それとも新規性のある表現が行われているのかを検討することで、テレビ自体に潜在するジェンダー意識を明らかにすることである。

【研究方法】

リオ五輪開幕に向けて、事前番組として 8 月 5 日に放送された 2 番組「リオ五輪が 100 倍楽しくなるテレビ」（NHK、生放送）、「リオ五輪 2016 開幕直前スペシャル」（テレビ朝日）の内容分析を行った。各番組について、登場する選手・競技の性別やエピソードの傾向について、主にその報道内容を検討した。

【研究対象の概要とその特徴、考察】

NHK 放送の「リオ五輪が 100 倍楽しくなるテレビ」は、NHK の一橋忠之キャスターと俳優の松岡茉優の MC に加え 3 人のゲスト（はるな愛、井戸田潤、朝原宣治）が登場し、生放送らしく Twitter と連動して視聴者のコメントやオリンピックに纏わるクイズが繰り広げられた。番組の内容は、①家族みんなで見たい競技トップ

3、②最も好きな日本のアスリート&最も見たい世界のアスリートトップ 10、③LIFE!スペシャル企画 三津谷寛治が、あのアナウンサーに!?!、④最新情報開幕直前のリオは!?!、⑤金メダルも狙える!輝く女性アスリート、⑥メダルを取るのは、いったい誰?大胆予測!?!の 6 つから構成されている。あえて輝く女性アスリートとして注目しているほか、放送内容が勝利至上主義である点も見受けられる。⑤のコーナーが建てられた理由に 2004 年アテネ大会以降金メダル数が男性より女性の方が多いうことを挙げており、特にバドミントン、卓球、シンクロナイズドスイミング、新体操を重点的に伝えていた。この中でシンクロと新体操は、「女性ならではの美の技」というコメントがみられたほか、女性監督の存在感が際立つ報じ方がなされ、特にシンクロ・井村監督の厳しさを賛美し、メダルの獲得こそが重要であるという論調が確認された。

一方のテレビ朝日が放送した「リオ五輪 2016 開幕直前スペシャル」は、リオ五輪のメインキャスターでもある松岡修造が MC となり、そのほかにも競泳・寺川綾、レスリング・浜口京子、サッカー・松木安太郎、バレー・川合俊一、シンクロ・青木愛と各競技の OB・OG が集い、「熱すぎる 20 エピソード」としてオリンピックに出場する選手・競技・監督が紹介されていくのをスタジオで見守る形の番組であった。20 のエピソードの中に登場した男女比は、9:11 と女性の比重が多く、監督としてシンクロの井村監督に焦点が当たったり、競泳の松田選手のコーチとして久世コーチが登場したりするなど、女性コーチの業績を詳しく紹介する側面も確認できた。一方で、特に女性選手に顕著であったのが、高校生の記号としての制服姿や、コーチ（同性）から檄を飛ばされる姿も数多く確認された。こうした描写は男性選手にはほとんど見られないものであり、ジェンダー格差を如実に表現するものであったといえる。

紙幅の都合で触れられないが、ニュース表現の中でもジェンダー格差は顕著に示されている。オリンピックという世界的イベントを通してテレビの中に常にジェンダー表現に基づく差異が生じていることに目を向け、指摘し続ける必要があるだろう。

女子ボクサーたちはどのような権利を求めたか

1970-80 年代の米国における女子ボクサーたちが直面した困難

○鬼頭茉衣（中京大学大学院）、來田享子（中京大学）

キーワード：女子ボクシング、ジェンダー、ウーマンリブ（第2派フェミニズム運動）、スポーツ政策

【研究の目的・方法】世界で最も早くボクシング競技への女子種目の採用を進めたのは、1988 年のノルウェーであった。国内統括組織が積極的に採用した事例である。10 年遅れて日本では、1996 年から女子競技の採用を目指す女子ボクサーが非公式の全国大会を開催した。これを契機に、日本ボクシング連盟により女子競技が採用されたのは 2001 年であった。

一方、これらの事例よりも前の 1970 年代から、米国では女子ボクサーの活発な活動がみられる。米国の統括組織による女性のボクシング実施に関する対応は州によって大きく異なるが、競技の実施を阻まれた女子ボクサーたちの中には、競技への参加を求め、統括組織を提訴する事例が存在した。そこで本研究は、これらの女子ボクサーたちに着目し裁判記録を検討した上で、当時の米国における女性たちのスポーツ環境を踏まえ、女子ボクサーが直面した課題を明らかにする。

この目的のために、対象とした女子ボクサーに関する資料、彼女たちが提訴した裁判の記録を収集する。これらの資料から彼女たちが得た権利について明らかにし、先行研究による知見との比較を行い、女子ボクシングが抱えていた課題を分析する。

【結果】

1. 女子ボクサーが得た権利

米国における女子ボクサーによる最初の訴訟は、1975 年の Jackie Tonawanda がニューヨーク州アスレチック委員会(以下、NYSAC)に対し、ボクシングライセンスの発行を求めたものであった。NYSAC は、女子ボクサーへのライセンス発行の拒否の理由として、①男子競技に悪影響を与える ②過度の外傷リスクを伴う ③対戦相手の不足、の 3 点をあげた。これに対し裁判所は、上記 3 つの理由は判断基準として妥当ではないとした上で、性別を理由にライセンスを発行しないことは不適切であるとする判決を下した。この裁判を契機に、3 年後、ニューヨーク州では女性に対してもボクシングライセンスが発行されるようになった。

2. 女子ボクサーが得られなかった権利

1982 年に Jill Lafler がゴールデン・グローブ・ボクシング大会(以下、GGB 大会)への出場を求めて、大会主催者であるアスレチック・コントロール・ボードを提

訴した。この裁判で Lafler は、連邦法およびミシガン州憲法における平等保護条項と、1964 年公民権法および、エリオット・ラーセン市民権法に反する性差別が行われたと主張した。これに対し裁判所は、①GGB 大会は男子競技の大会であり、男性に限定して大会を実施することに違法性はない ②コンタクトスポーツの場合、男女別で競技を実施することは支持される③女子競技のみの大会を実施することで解決する、との理由から Lafler の要求を棄却した。このため、Lafler は試合での実践の場を得ることができなかった。

【考察】1970 年代に米国で争われた女性の権利獲得に関わる裁判を概観すると、その多くが「中絶の選択」に関するものであり、「女性のスポーツ参加の可否」に関する裁判は限定的である。この理由は、米国では 1960 年代後半には一般女性にも競技スポーツの門戸が広がり(井上, 2007)、1972 年には Title IX が成立したことが影響したと考えられる。一方、井上の検討では、1970 年代に入っても大部分の女性体育教師が競技性の高い対校戦に反対し、女性たちのスポーツ参加の内実は「過度にならないレクリエーション的なもの」であったこと、その転換点のひとつは、1974 年にニュージャージー州での野球のリトルリーグへの女子の参加を認める判決であったことも指摘されている。

今回対象とした女子ボクサーたちの訴訟は、こうした野球での権利獲得の延長線上に位置づけることができる。しかし、2 つの判例に示されたとおり、女子ボクサーたちは、ライセンスを獲得しても組織による実践の場の提供は得られなかった点で野球の事例とは異なっていた。この背景には、ボクシングが Title IX の効力が及びにくい民間のボクシングジムで実施されていたことがあると考えられる。

冒頭にあげたノルウェーの事例では、1970 年代から国の男女平等法やクォーター制導入があり、この方針が各スポーツ組織にも浸透していた。この事例と米国で女子ボクサーたちが直面した困難とをあわせて考えると、教育やスポーツ分野が国全体のジェンダー平等に関する法律や政策と接続した政策を進めることの重要性が示唆され、日本のスポーツ政策においても視野に入れるべきであると考えられる。

スポーツに関わる理学療法士が長期に活動を継続するための課題

産休・育休後のトレーナー活動の現状と性別役割分業意識

○平野佳代子（井戸田整形外科名駅スポーツクリニック）、來田享子（中京大学）

キーワード：理学療法士、トレーナー活動、性別役割分業意識、産休、育休

【はじめに】

近年、多方面において女性の活躍を支援する Diversity & Inclusion をめざした取り組みがなされている。一方で、家庭内における家事・育児について、依然として女性が多くを担っており、男女平等の実現には至っていない。昨今の社会変革に伴い、旧来の「男は仕事、女は家事育児」という性別役割分業観は薄れつつあるが、女性の社会参画が進んでいる国と比較して、その意識が強い現状がある（内閣府男女共同参画局・2017）。

スポーツ現場でトレーナー活動（以下、Tr 活動）を実施する理学療法士（以下、S-PT）は、女性割合が少なく、増員の必要性があると指摘されている（小林・1998、片寄・2022）。PT の多くは、医療機関等での勤務の傍ら Tr 活動をしているため、多くの時間や労力を要していると推測される。そのため、勤務、Tr 活動、家庭を両立することに困難さを生じ、特に子をもつ女性への負担が大きく、長期に Tr 活動を継続することの障壁になっていると考える。

本研究では、S-PT を対象に、産休・育休取得状況、およびその後の Tr 活動の現状と性別役割分業意識を調査し、その関係を確認する。

【研究方法】

国内の S-PT を対象に、Web アンケート調査を 2021 年 4 月 15 日～2021 年 5 月 20 日に実施した。回答者 406 名のうち、「性別」を男性または女性と回答し、かつ Tr 活動実施中の 383 名（男性 291 名・75.9%、女性 92 名・24.1%）とした。

1. 性別役割分業意識について、質問内容（回答）を、1) 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきか（Yes、どちらともいえない（以下、N.A.）、No）、2) 女性の方が男性より家事・育児に向いていると思うか（Yes、N.A.、No）とし、加えて、2. 1) 子と同居している数、2) 産休・育休の取得有無、3) 復職後の Tr 活動の状況について調査した。統計学的分析は、1 の各項目について、性別にクロス集計し、 χ^2 検定を用いて差の検定、有意差を認めた場合は、残差分析で関連がある項目を抽出した。解析には、SPSS Statistics を用い、有意水準は危険率 5%とした。なお、中京大学の倫理審査委員

会で承認（承認番号 2020-48）を受け、回答者にはアンケートの回答をもって同意を得た。

【結果】

1. 回答を Yes、N.A.、No の順で件数および性別内の割合を示す。1) 男性：29 件・10.0%、83 件・28.5%、179 件・61.5%、女性：6 件・6.5%、17 件・18.5%、69 件・75.0%、2) 男性：29 件・10.0%、83 件・28.5%、179 件・61.5%、女性：6 件・6.5%、17 件・18.5%、69 件・75.0%であった。2) で有意差を認め、男性の Yes と女性の N.A. が有意に多く、女性の Yes と男性の N.A. が有意に少なかった。2. 1) 男性 172 名・59.1%、女性 16 名・17.4%であった。2) 産休取得者は女性 16 名・100%、育休取得者は男性 11 名・0.6%、女性 16 名・100%であった。3) 出産前後における Tr 活動の状況について、変化ありは男性 64 名・37.2%、女性 13 名 81.3%、なしは男性 50 名・29.1%、女性 1 名・0.6%であった。

【考察】

調査結果より、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」について、性別で差はなかったが、男性は女性と比較して「女性の方が男性より家事・育児に向いていると思う」ことがわかった。内閣府男女共同参画局は性別によるアンコンシャス・バイアスは同様のギャップがあり（2021）、男女の家事参入率が未婚時は 1:1 であるのに対し、結婚すると女性は男性の約 2.5 倍に増加している（2020）と指摘している。今回の結果はこうした社会一般の現状ともつながっている。

男性の育休取得率は 0.6%と著しく低い結果であり、2022 年度の企業で働く男性は 13.97%であった。国として男性の育休取得率上昇を推進しているが、Tr 分野には大きな課題があるといえる。

出産前後における Tr 活動状況の変化では、女性の多くは変化を強いられる一方で、男性も 4 割弱は同様であった。家庭生活における男性の役割は増加しており、その要因は、近年の社会的風潮の変化、核家族化、少子高齢化による労働力不足等により女性の社会進出が促進されていることがあると推察される。

時間的拘束が生じる S-PT における Tr 活動では、社会一般以上に積極的な対策を講じる必要があることが示唆された。

スポーツ指導者の多様な性に対する知識と態度の変化

2017 年度と 2022 年度の調査結果の比較より

○大勝志津穂（相山女学園大学）、高峰修（明治大学）、伊東佳那子（中京大学）、建石真公子（法政大学）、田原淳子（国士舘大学）、藤山新（東京都立大学）、松宮智生（清和大学）、來田享子（中京大学）

キーワード：スポーツ指導者、LGBT、多様な性、行動変容

1. 研究の背景および目的

2017 年度、(公財) 日本スポーツ協会（以下、JSPO）に登録する公認指導者を対象に多様な性に関する調査を行い、実態の把握を試みた。その結果、指導者がスポーツにおける多様な性に関わる情報や課題について、知らないことがある一方、それらの情報等を知る必要性や知りたいと考えていることが明らかとなった。そこで、JSPO を通じて研修会を開催したり、動画教材を提供したりしてきた。

本報告では、2022 年度に行なった同様の調査と 2017 年度の調査結果を比較し、公認指導者の多様な性に対する知識と態度の変化について報告する。

2. 分析方法

2022 年度調査について単純集計ののち、2017 年度と 2022 年度の調査対象者の属性についてクロス集計を行い、 χ^2 検定を用いて調査対象者の属性の違いを検討した。その後、多様な性に関する知識や情報収集に関する 5 項目について、個人属性別に 2 つの調査結果を比較した。

3. 分析結果

(1) 個人属性

性別、年代、学歴、指導者資格、指導状況について有意な差がみられた。2022 年度の調査対象者の方が、男性が多く、年齢が高い傾向がみられた。指導者資格では、新しい指導者資格が追加された影響も考えられるが、地域で補助的な指導をする人やスポーツ少年団で指導する人が多い傾向がみられた。

(2) LGBT という言葉の認識

LGBT という言葉を聞いたことが「ある」と回答した人の割合は、69.0%から 95.7%と増加した。特に、増加幅が大きかったのは、男性、40 歳以上の年代、(旧) スポーツトレーナー、コーチ 2 (旧上級指導員) であった。指導者資格別で「ある」人の割合が低かったのは、フィットネストレーナー (90.9%)、スタートコーチ (91.5%)、クラブマネジャー (92.9%) であった。

(3) LGBT に関する知識習得の必要性

「とても感じた」「多少は感じた」と回答した人の割合は、63.4%から 68.0%に増加した。性別では男性、

わからない、年代では 60 歳以上、指導者資格では上級教師が大きく増加していた。必要性を感じていた割合が 8 割以上であったカテゴリーは、20 歳代、30 歳代、教師、アスレティックトレーナーであった。

(4) LGBT に関する学習行動

LGBT に関して「よく」「時々」調べたりしてきた人の割合は、29.8%から 39.0%に増加した。性別では男性、年代では 50 歳以上、指導者資格では (旧) スポーツトレーナー、上級教師、スポーツドクターの増加幅が大きかった。

(5) 今後の LGBT に関する知識習得の必要性

「とても感じる」「多少は感じる」と回答した人の割合は、76.8%から 87.2%に増加した。「とても感じる」「多少は感じる」と回答した人の割合が 90%以上だったのは、性別では女性、答えたくない、わからない、その他、年代では 30 歳以下、指導者資格ではコーチ 3 (旧コーチ)、教師、アスレティックトレーナー、スポーツドクター、スポーツ栄養士であった。

(6) 今後の LGBT に関する学習行動の可能性

「とてもするだろう」「多少はするだろう」と回答した人の割合は、59.2%から 77.7%に増加した。各カテゴリーで増加幅が大きかったのは、男性、50 歳以上の年代、指導者資格ではコーチ 2 (旧上級指導員)、コーチ 1 (旧指導員)、スポーツプログラマーであった。

4. まとめ

2017 年度の結果では、男性より女性、高齢層より若年層の方が LGBT フレンドリーな傾向を示し、また、地域を拠点として指導する人の方が LGBT に対する情報収集意識が弱い傾向を報告した。今回の調査対象者は 2017 年度より男性、高齢者層が多く、さらに、地域を拠点とした指導資格取得者が多かったにも関わらず、全体的に LGBT フレンドリーな結果を示した。今回の調査はパネル調査ではないため、個人の変化を明らかにすることはできないが、有資格者が LGBT 等の多様な性に対して、自分ごととして捉える意識がこの 5 年間で高まった可能性を示したと言える。今後の要望では、研修会の開催や情報提供は以前と変わらずあるため、新しい情報を提供し続けることが求められる。

学会員研究プロジェクト報告

「身体の規律化手段への抵抗

－中国都市の太極拳教室の女性たちを対象にして－」

身体の規律化手段への抵抗

—中国都市の太極拳教室の女性たちを対象にして—

○範麗娟（関西学院大学）

キーワード：抵抗、都市太極拳教室、中高年層女性、階層、自己決定

1. 研究背景と問題提起

中国では女性の身体に対する規律化が歴史的に行われてきた。例えば、纏足・胸つぶし・束髪などがある。20世紀初期、富国強兵のために、産む性を持つ女性の身体が中国政府にとって重要視されたため、「反纏足運動」（楊 2004）「断髪革命」（高嶋 2010）「女性の身体解放」（周 2017）といった革命が起こった。また、女性の体育活動への参加も推奨されるようになった。

近代中国の女性体育活動への参加について、游（2012）は女性体育活動が富国強兵の産物であるだけでなく、女性の身体解放、男女両性関係、伝統的な社会価値観にも影響を与えたと指摘した。FAN（1997）は1840年から1949年までの女性体育活動の発展過程において、女性が体育活動を通じて身体を解放を達成したと論じている。これらの研究から、女性の体育活動への参加は身体の規律化に対する抵抗の一形態だと思われる。

現代では、身体の規律化に対する抵抗方法は、女性の年齢や階層によって異なる可能性がある。熊（2012）は経済的に自立した都市部の中間階層の女性たちが有料のスポーツジムを選択する一方で、収入の少ない都市部の労働者と失業者の女性たちが無料の広場舞と簡単化太極拳を選ぶ傾向があると考察している。しかし、熊（2012）の研究では、女性の年齢層について具体的に論じられていない。南（2020）は中国都市部の広場や公園などの公共空間で無料で行われる広場舞を中高年層の女性が主体となり、特に地方から都市部に移住する下層階級の女性が多いと指摘している。

本研究では、もし下層階級の中高年層の女性たちが広場舞や簡単な太極拳を身体の規律化への抵抗手段とするならば、中間階層の中高年層の女性たちはどのような体育活動や抵抗手段を選択するのかを考察し、さらにこれが現代中国において持つ多様な意味をジェンダー問題と関連付けながら考える。

2. 調査方法と調査対象者

筆者は2023年2月から6月まで、オンライン（WeChat）によるインタビューを実施した。調査対象者は13人で、男性2人・女性11人である。彼らは主に筆者が2022年1月から3月まで通っていた都市部の

Y太極拳教室のメンバーである。この教室では伝統的な陳氏太極拳が教えられ、経営者のZさんは60歳で、「太極拳発祥地」の河南省陳家溝の出身である。参加費用は様々含めて年間で7,000元に達することもある。

3. 結果及び考察

1) Y太極拳教室の主な参加者

Y太極拳教室の練習者のうち、中高年層の女性が約70%を占めた。彼女たちは1950年代と1960年代の活発な政治運動が行われた時代に生まれた人々である。彼女たちの多くは国営企業の管理職、一般的な会社員、教師、または高級会計士などとして働いた経験を持ち、既に定年を迎えている。さらに、そのうちのほとんどは1人の子供を持つ母親である。つまり、彼女たちは都市部の中間階層に属すると言えるであろう。

2) 太極拳教室の中高年層女性練習者についての考察

彼女たちが太極拳教室を選択する理由について以下のように考察する。第一に、中国では女性の定年年齢が男性よりも5年または10年早く、また老後に再就職する環境も存在しない。彼女たちは社会主義集団化時代を経験した世代として、団体生活への参加意欲を持ち、退職後も社会との関わりを維持したいと考えている。次に、「広場舞」と簡単化太極拳などの集団活動は近年、否定的なイメージが広まった。マスメディアによって騒音問題や公共空間の占有、武術の本質を失った偽の武術として揶揄されることが多くなった。また、彼女たちは1980年代以降の市場経済の波に乗り、経済的に自立している。さらに、子供を1人だけ持ち、育児や経済的な負担が少ない。彼女たちは市場経済以降に進行した個人化の意識を受け取り、家庭だけでなく、自分自身を表現したいという意欲を持っている。最後に、スポーツジムは中国に比較的最近導入されたものであり、若者やブルジョワ階級の文化と見なされている。Y太極拳教室は単なるレジャー施設ではなく、カルチャーセンターとして彼女たちの間で人気がある。

南（2020）は、広場舞を踊る中高年層の女性たちが公共空間で堂々と胸を張って踊るのが自己表現だと指摘している。同様に、Y太極拳教室の女性練習者たちは有料施設で伝統的な太極拳を実践することを通じて、身体の規律化に対する抵抗をしているのである。

実行委員会企画

「スポーツとジェンダー・データブック 進捗報告と意見交換」

実行委員会企画「スポーツとジェンダー・データブック 進捗報告と意見交換」

○藤山新（東京都立大学）、赤澤祐美（国士舘大学大学院）、岩佐直樹（朝日大学）、小林直美（愛知工科大学）、鈴木楓太（京都先端科学技術大学）、関めぐみ（甲南大学）、波多野圭吾（国士舘大学）、山口理恵子（城西大学）

キーワード：スポーツ・ジェンダー研究

1. データブック作成の経緯と本セッションの趣旨

日本スポーツとジェンダー学会では、2010年に『スポーツ・ジェンダー データブック 2010』を刊行した。これは、学会設立から10年の節目にあたり、現実のデータから体育・スポーツの男女共同参画の現実を直視し、課題を認識するきっかけを作ることを目指して作られたものである。その源流には、本学会の設立中心メンバーが2001年に発行した『目でみる女性スポーツ白書』がある。その後、2013年に追記・修正を施した『スポーツ・ジェンダー データブック 2010 第二版』を刊行、2016年には、『データでみるスポーツとジェンダー』を新たに発行し、継続的な情報の蓄積とアップデートを行ってきた。今般、さらなるデータの蓄積や社会状況の変化に伴った新しい切り口の必要性など、データブックの改訂版、または新規作成の必要性が認められる状況にあると言える。こうした状況を踏まえ、設立20周年にあたる2022年度をスタートとして、データブック作成を進めている。

本セッションは、新たなデータブックの作成にあたって本学会の蓄積してきた研究成果を反映すべく、各章の項目や重点を置くべきポイント、データの集め方などについてのアイデアやアドバイスをいただくことを目的とする。

2. 編集プロジェクトチームでの議論

2022年10月に理事会構成員に呼び掛けて編集プロジェクトチームを結成し、PT内で議論を進めている。

データブックの基本的な性質としては、研究者をはじめ、スポーツとジェンダーに関心のある方にとって有用性のあるデータを掲載することはもちろんだが、それに加え、学校教員やスポーツ指導者など、ジェンダーに関する専門知識を持たない人がスポーツとジェンダーに関する課題に関心を持ち、理解することを促すような内容にすることを目指す。そのために、全体の構成としては、文部科学省やスポーツ庁、学習指導要領などの枠組みに準拠した構成とすることで、問題群を整理し、スポーツとジェンダーに関する専門知識を持たない人が理解しやすいようにする。

また、オリンピックなど大規模な国際的な競技大会に関するデータについては、その重要性は当然あるが、多様なレベルのスポーツに視点を向けるという観点から、章として特出しをすることはせず、各章に適宜割り振ることとする。同様に、セクシュアル・マイノリティに関するデータや暴力・ハラスメントに関するデータも、各章に適宜割り振ることとする。

執筆者については、基本的にJSSGS会員に依頼するが、専門性や調査の実績、ほかにないデータを持っているなどの理由があれば、非会員にも参画していただく方向で検討している。また、前回の執筆者にも、可能な範囲で関わっていただけるよう呼び掛ける予定である。

3. データブックの構成案

- 1) スポーツとジェンダーに関する年表
- 2) 「する」スポーツ
生涯スポーツ、運動部活動、プロスポーツなど
- 3) 「見る」スポーツ
メディア、報道、SNS など
- 4) 「ささえる」スポーツ
公認スポーツ指導者、スポーツボランティア、統括団体など
- 5) 「知る」スポーツ
学校教育、倫理規定やガイドラインなど
- 6) スポーツとジェンダーに関するリソース集
収集したものの掲載に至らなかったデータやメディアコンテンツの紹介、団体の情報などのリソース集

4. 当日の進め方

- 1) 企画概要とここまでの議論の説明（15分）
- 2) 質疑応答（5分）
- 3) 各章の概要説明（各章担当・5分×4）
- 4) 各章別のグループに分かれて意見交換（30分、移動自由）
- 5) 各グループの議論の共有（3分×5）
- 6) まとめ

日本スポーツとジェンダー学会 入会のご案内

日本スポーツとジェンダー学会（JSSGS）では、随時、会員の入会を受け付けております。事務局まで直接お問い合わせいただくか、本学会のホームページよりお申込みください。

<入会お申し込み／お問い合わせ先>

日本スポーツとジェンダー学会 事務局

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学 文学部 井谷研究室内

Tel/Fax : 06-6368-0509 e-mail : info@jssgs.org

<JSSGS ホームページからの申込方法>

日本スポーツとジェンダー学会のホームページ（<https://jssgs.org>）にアクセスし、会員登録ページから入力フォームに必要事項をご入力ください（入力事項に間違いがないかご確認の上、「送信」ボタンをクリックしてください）。事務局から申込み受付確認のメールを返信します。なお、オンライン登録をご利用いただく場合は、下記の事項にご注意ください。

フォーム送信後、1週間を経過しても事務局から返信メールが到着しない場合は、送信トラブル等が発生した可能性がありますので、お手数ですが info@jssgs.org までご連絡ください。

オンラインでの登録は、仮登録となります。JSSGS 規約に定められた会費を納入していただくことにより、登録が正式に完了します。なお、会費納入方法などにつきましては、事務局からの申込み受付確認メールでお知らせ致します。

◆現在の会員種別と年会費は下記のようになっています。

(1) 正会員

A. 65 歳以上または非正規雇用の希望者 年額 3,000 円（ご希望の方は事務局までご連絡下さい）

B. A 以外の正会員 年額 7,000 円

(2) 学生会員 年額 2,000 円

(3) 団体会員 10 名につき年額 10,000 円

(4) 賛助会員 年額 10,000 円

<ホームページのご案内>

日本スポーツとジェンダー学会では、スポーツとジェンダーに関わる情報交換の場としてホームページを開設しています。研究集会への案内や報告をはじめ、図書情報、関連サイトへのリンク集などがご覧いただけます。今後も内容をさらに充実させていく予定です。皆様のアクセスをお待ち致しております。

◆JSSGS ホームページ URL <https://jssgs.org>

「スポーツとジェンダー研究」投稿論文募集のご案内

日本スポーツとジェンダー学会（JSSGS）の研究誌「スポーツとジェンダー研究」を毎年 3 月に刊行しております。同誌には、その年度に開催された JSSGS 主催の学会大会・研究交流会報告の他、スポーツとジェンダー研究に関する論文、研究ノート、海外文献紹介、書評等が掲載されます。原著論文、研究ノートの投稿は随時募集しております。

編集規定並びに投稿規定を厳守の上、ご投稿ください。両規定につきましては、学会事務局にお問い合わせいただくか、本学会ホームページでご確認ください。

2023 年 9 月 30 日までに投稿された論文等は、2024 年 3 月に刊行予定の第 22 巻掲載分として審査されます。皆様の投稿をお待ちしております。

日本スポーツとジェンダー学会大会（第4回までは研究会大会）のあゆみ

回数	開催年月日	会場名	場所	大会テーマ／研究企画等	備考
設立記念 第1回	2002年6月22日	大阪府立女性総合センター （ドーンセンター）	大阪府 大阪市	スポーツのジェンダー研究を 展望する	設立総会で「日本スポーツとジェ ンダー研究会」設立
第2回	2003年7月5日-6日	京都教育大学	京都府 京都市	大会テーマを特に設定せず、 多様なテーマ	
第3回	2004年7月3日-4日	文京学院大学 本郷キャンパス	東京都 文京区	大会テーマを特に設定せず、 多様なテーマ	
第4回	2005年7月2日-3日	中京大学 名古屋キャンパス	愛知県 名古屋市	大会テーマを特に設定せず、 多様なテーマ	総会で「日本スポーツとジェ ンダー学会」に名称変更
第5回記念	2006年7月1日-2日	京都市国際交流会館	京都府 京都市	女性スポーツ政策	6月26日に日本学術会議協力学術 研究団体に指定 Ann Hall博士（University of Alberta名誉教授）招聘
第6回	2007年7月7日-8日	法政大学 市ヶ谷校舎	東京都 千代田区	体育学・スポーツ科学における 性差認識とジェンダー	
第7回	2008年7月5日-6日	大阪府立女性総合センター （ドーンセンター）	大阪府 大阪市	メディア・スポーツ・ジェンダー	
第8回	2009年7月4日-5日	国立オリンピック記念 青少年総合センター	東京都 渋谷区	1.東アジアのスポーツとジェンダー 2.大学教育における体育・スポーツと ジェンダー	
第9回	2010年7月3日-4日	神戸松蔭女子学院大学	兵庫県 神戸市	スポーツ・性暴力・ジェンダー	
第10回記念	2011年7月2日-3日	中京大学 名古屋キャンパス	愛知県 名古屋市	スポーツとジェンダー研究の 現状と課題	Gudrun Doll-Tepper博士（Freie Universität Berlin教授）招聘
第11回	2012年7月7日-8日	学習院女子大学	東京都 新宿区	開発におけるジェンダーと スポーツ	
第12回	2013年7月13日-14日	京都教育大学	京都府 京都市	身体とエンパワーメントを考える	
第13回	2014年6月28日-29日	中京大学 名古屋キャンパス	愛知県 名古屋市	スポーツ・ジェンダー学の射程	
第14回	2015年7月4日-5日	明治大学 駿河台キャンパス	東京都 千代田区	スポーツにおける平等・公正と は：ジェンダーの観点から	
第15回記念	2016年7月2日-3日	東京女子体育大学	東京都 国立市	メディアにおけるスポーツ身体 の表象	Toni Bruce博士（University of Auckland准教授）招聘
第16回	2017年7月1日-2日	京都学園大学 京都太秦キャンパス	京都府 京都市	多様性における平等と共生	Heather Sykes博士（University of Toronto准教授）招聘
第17回	2018年7月7日-8日	中京大学 名古屋キャンパス	愛知県 名古屋市	社会的格差とスポーツ	
第18回	2019年6月29日-30日	松本大学	長野県 松本市	インターセクショナルな視点から スポーツとダイバーシティを問う	
第19回	2020年10月24日	オンライン開催		<研究企画テーマ> コロナ禍における体育・スポーツに 関連する話題／2020横浜スポーツ学 術会議における『スポーツとジェ ンダー』にかかわるシンポジウム報告	・新型コロナウイルス感染症拡大 に伴う学会史上初オンライン開催 ・オンライン開催に伴い内容を 絞って開催
第20回	2021年10月23日	オンライン開催		<研究企画テーマ> スポーツとジェンダーに関する国内 研究のレビュー／東京2020“女性蔑視 発言”の追跡調査から考えるスポーツ 界のジェンダー平等	・新型コロナウイルス感染症拡大 に伴うオンライン開催 ・オンライン開催に伴い内容を 絞って開催
第21回記念	2022年7月2日	オンライン開催		<20周年記念企画> 学会発足20年を振り返る：創設メ ンバーの思いを継承する	Kari Fasting博士（Norwegian School of Sport Sciences名誉教 授）より記念祝辞

日本スポーツとジェンダー学会 第22回大会
プログラム&発表抄録集

2023年7月1日発行

編集発行：日本スポーツとジェンダー学会 第22回大会実行委員会

〒501-0296 岐阜県瑞穂市穂積 1851

朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科 岩佐直樹研究室内

E-mail : congressoffice@jssgs.org HP : <https://jssgs.org>

発行者の許可なく転載することを禁ず